「羅馬教皇宛大友宗麟書状及び同包紙」

[illegible]

奉仰[illegible]

天平二年十一月七日　豊後国[illegible]

皇帝貴殿[illegible]

たけ様に　奉上

大友左衛門督入道

豊後国[illegible]

皇帝貴殿[illegible]

たけ様に　奉上

豊後国[illegible]

雜　纂

羅馬教皇宛大友宗麟書狀に就いて

新村出
濱田耕作

昨年黑田源次博士の斡旋に由り、伊太利人ロッス氏から我が京都帝國大學文學部の所藏に歸した天正年間遣歐使節に關する珍貴なる三通の古文書に就いては、既に其の原大の複製と共に『天正年間遣歐使節關係文書』と題する「モノグラフ」を史學研究會から出版して之に簡單なる解說を施したことがあつたが、更に何時か機會を得て稍々詳細なる考說を書く積もあつたところ、其のうち大友宗麟の書翰に就いて、最近其の解釋を新にしなければならない點を發見したので、先づ此の書翰に就いて述べて見度いと思ふ。

此の書狀は大形の鳥の子紙に書かれ、其の包紙をも具備してゐるが、書狀の方は、前紙一葉若しくはそれ以上を闕失して、今は最後の一紙のみ殘つてゐるので、文意を詳にし難いものがある。それで嚴密に云はゞ使節とは直接の關係のないものかも知れないが、他の大村純忠、有馬晴信の書狀が使節に關係するものであり、又た同時に出でた

ものであるから、假に關係文書として題して置いたのである。なほ二三文字の蝕損してゐる處があるが、判讀するには差支はない。今は先づ其の全文を左に掲げやう。

書狀（横一尺九分竪一尺二分）

〔前闕〕露命の內に是を申叶へ、常住拜顏致に於ては存殘す事なく、しめあんと共に、今ははや我眼卽笑を得奉る上者、無事にさしゆるし給へと言上すべき外、別になき所也、此等の旨御披露奉仰候、恐惶謹言

天正十二年十一月七日　普蘭師司怙（花押）

是壽貴理師度之御代官　惠誨禮閣之御司

はは樣江奉上

包紙（竪一尺六寸七分、横一尺九分）

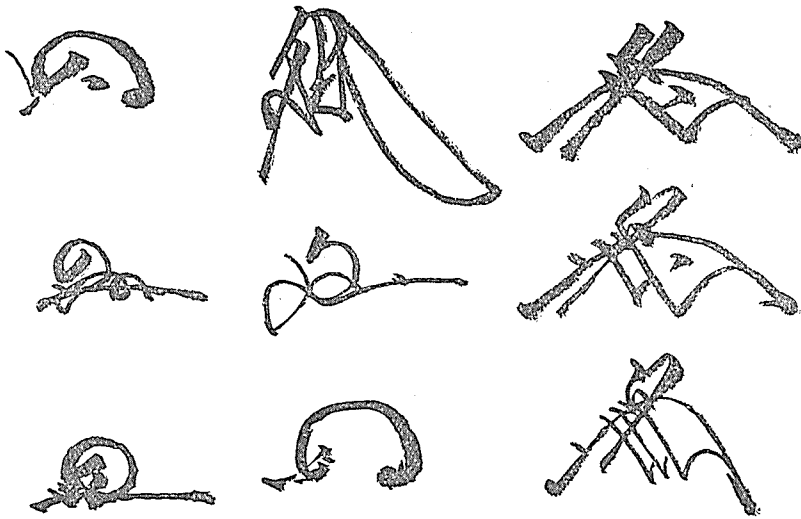
是壽貴理師度之御代官惠誨禮閣之御司

はは樣江奉上

大友左衞門督入道　普蘭師司怙

卽ち此の日附は使節が歐洲に發航せる天正十年一月（一五八二年二月二十日）より約三年に達せんとする頃であつて、當時一行は西班牙マドリーに滯在し、羅馬教皇グリゴリヨ十三世の謁見を遂げた八五年天正十三三月に先つこと數ケ月前であるから、使節等が之を携へて羅馬に赴いたことは有り得ない。恐らくは一五八六年以後に始めて先方へ到着したものと推定せられる。而かも一方新井白石の『采覽異言』や『西洋紀聞』に、天正十二年の春大友氏が其の臣植田玄佐なるものを、羅馬に派遣したこと見えて居るが、果して此の事を以て事實とするも、此の書狀の日附は年は同じであるも月は甚しく隔つてゐるので、此等とは別便を以て教皇に發送したものとするのが最も穩當なる見方であらう。

さて書狀は已に云つた如く、前文を闕いてゐるので「露命の內に常住拜顏致に於ては」の文句は、前の解說に於いて想像した如く、宗麟が此の頃病



大友義鎮宗麟華押（華押類纂に據る）

弱であり、永く生存する望なく、或は敎皇の肖像などを拜領せんことを願出たとも見る可きであるが、固よりこれは空漠たる一箇の想像に過ぎない。次に「しめあんと共に今ははや我眼卽笑を得奉る上者」云々のしめあん（Simean, Simon）に就いては、嚮きに大友氏の一族中外戚なる田原親虎（西史の松野四郎殿、初め宗麟の女婿に擬せらる）或は毛利元就の末男隆景（西史の藤四郎殿、宗麟の女に配す）が同じシメオンなる敎名を有して居るが、親虎としては時代較々後れ、隆景としても未だ之に擬定する憑證のないことを述べて置いた。然るにこれは斯の如き現實の人に充つ可きではなく。『新約聖書』路加傳に見えてゐる猶太の翁シメオンの故事から出でて、「此の最上の望を果したる上は死するとも遺憾なし」と云ふ意の諺である。卽ち路加傳（第二章、二五—三五）に

「偖エルサレムにシメオンと云ふ人あり、斯人は義し

く且つ敬みありて、イスラエルの民の慰められん事を俟てる者なり、聖靈その上に臨り、また主のキリストを見ざる間は死なじと聖靈にて示さる。かれ聖靈に感じて神殿に入り、兩親その子イエスを律法の例に循ひて行はんと携へ來りしにシメオン嬰兒を抱き、神を讃め云ひけるは、主よ今その言に從ひて僕を安然に世をば逝せ給ふ。我目すでに萬民の前に設たまひし救を見たり、これ異邦人を照さん光なり、また爾の民イスラエルの榮なり、其の父母は嬰兒に就て語る事を奇をれり、又シメオン彼等を視て其母マリヤに曰けるは、此嬰兒はイスラエルの多の人の頽びて且つ興らん事と、誹毀を受ん其の號に立てらる。これ衆の心の念の露れんが爲なり、又劍なんぢが心をも刺透べし。」

とあるのが其の典據であり、拉丁語にては"Nunc dimitis(servum tuum,Dominae)"と云ひ頗る慣用の諺となつてゐる。我々は之に由つて始めて「我眼卽笑を得奉る上者」の語の、前文「露命」云々と相照應して、文意を氷解し得るのであるが、之を以ても當時我が奉教者中には斯の如き聖書中の故事典據を援引して、頗る自由なること恰も支那の古典に於けると相似たものがあつたことを知ることが出來るのである。一方宣教師等が日本支那の古典を研究して之を其の說教著書などに取り入れると同時に、吉利支丹文學の我が奉教者間に於ける感化の想像以上に深く、且つ大なるものがあつたことを知るに足りると思ふ。なほ此のシメオンの故事を以て「此の望が叶へる上は死すとも遺憾なし」の意を現はした事例は、固より西洋には枚擧に遑もないが、我々が此の用法を氣付くに至つた動機として、又た使節に關係する事件として、其の一例を擧ぐれば、我が使節一行が老教皇グレゴリヨ十三世に謁見を濟ませた時、教皇は滿足して其の座を立ち去らんとする時、此のNunc云々の語を發したことバルトリに見えてゐる。（D, Bartoli, II Giappone, IIa, § 79）

次に宛名の是壽貴理師度は、云ふまでもなく耶蘇基督（Jesus Christ）であり、惠誨禮閣は「えけれじや」（葡語 Egrêjà 拉丁Ecclenà）の音譯、教會の義であつて御代官はVicario（英 Vicar）の譯であつて、此の「イエス・キリストの代理者、全教會の頭領」なる語は羅馬教皇に對する慣用の敬稱である。「はは樣」の教皇 Papa（英Pope）なること今更云ふ迄もなく、「普蘭師司怙」は義鎮宗麟の教名 Francis を寫したものたること亦た明かである。彼は已に永祿五年入道して三非齋宗麟と稱して居つたので、「左衞門督入道」と包紙に書いてあるのであるが、元來入道の稱は佛教に關係あるものであるのに關らず、「入道フランシスコ」とあるのは、當時の世相を現はして面白いことである。

とにかく宗麟の此の書狀は、不幸にして其の主要なる部分を缺き、全體の主旨を明にすることが出來ないのを最も遺憾とするが、他の二書狀に比して紙幅も大きく立派であり、手蹟は固より祐筆の手に成つたものであらうが、最も鄭寧美麗な御家流を示して居る。恐らくは二年前伊藤マンチヨに持たせた教皇宛の文書も、之と同じ人の手蹟に成つたものであるかと思はれる。遺憾にして此の書翰は今ま其の所在を失つてゐるが、たゞ用紙は斯の如き鳥ノ子の白紙とは違つて、金銀の砂子を散した今もヴアチカノ圖書館にある伊達政宗の文書と同樣のものであつたらしい。其の事は一五八五年三月廿三日附、羅馬駐劄ヴエネチヤ大使プリウリ（Lorenzo Priuli）が大統領へ宛て、使節等が教皇に謁見の次第を報告した書翰（Berchet, Le Antiche Ambasciate Giapponese in Italia. 第二號文書）のうちに、"apprecentio una lettera di credenza, scritta in lettere d' oro, et in cosa che più assomiglia a scorza d' arbre, che d' altro, piegata per luogo in pieghe minute et torta nei capi"

とあり、此の「金を以て木の皮の如きものに書いた」とあるのは他の用例から見て必しも金字で書いたのではなく、金砂子地に墨を以て書いたものと解す可きである樣に思はれる。又た右のプリウリの書翰の文句に包紙の「堅に細く折り頭を折つてある」と見えてゐるのも、全く今我々の取扱つてゐる書狀のそれと同一である。なほ此の書狀に於ける宗麟の花押が、從來普通に見るものと全く變つてゐるのも注意す可く、或は羅馬字のF.などの字から脫化したものでなからうか。此等は古文書國史の專門家の研究を仰ぐ可き問題であるから、我々は今ま多くを云はないことにする。